

第 35 回 ('25) 書学書道史学会大会

今年度の大会は、10月25日(土)・26日(日)の両日、奈良教育大学(〒630-8528 奈良市高畑町)において開催します。詳しいプログラムは3・4頁のとおりです。今年度も研究発表に加え、記念講演会とシンポジウムを企画いたしました。多数のご参加をお待ちしております。本状は大会当日にお持ちください。会員の確認として使用する場合があります。

なお、本大会の開催に関する最新の情報は学会ホームページでお知らせいたしますので、本状発送の後も随時ご確認ください。またホームページには、本状のデータを掲載しますので、適宜ご利用ください。

10月25日(土)

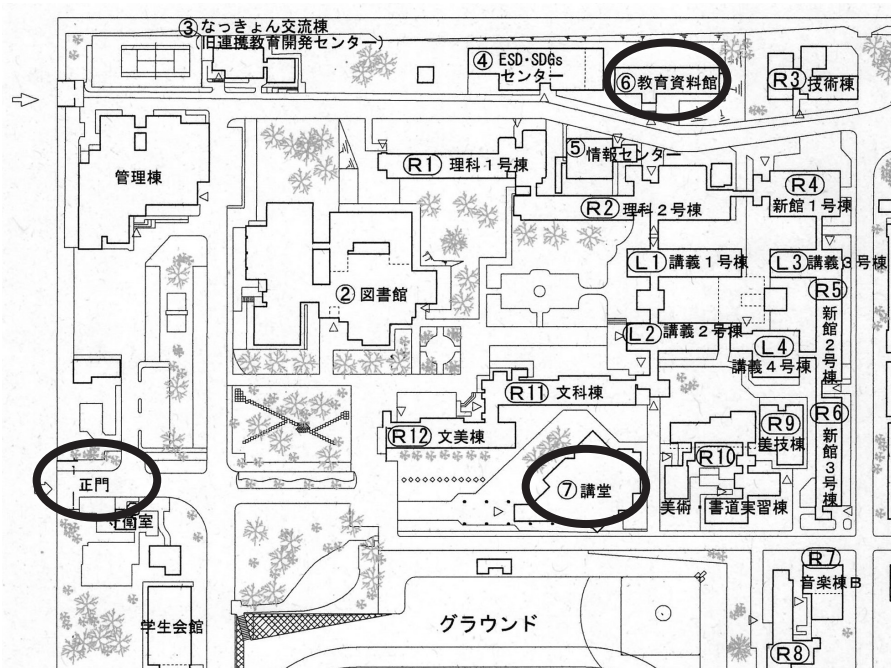
- 12:00 受付開始
- 12:40～13:25 開会式・総会
- 13:30～15:00 研究発表
- 15:15～17:00 シンポジウム
- 17:30～19:30 懇親会

10月26日(日)

- 9:00 受付開始
- 9:30～12:10 研究発表
- 13:00～15:10 研究発表
- 15:20～16:40 記念講演
- 16:40～16:50 閉会式



〈奈良教育大学〉



〈奈良教育大学マップ〉

本年度大会会場の奈良教育大学へのアクセスは以下のとおりです。

JR 奈良駅から：東口バスのりば2番発「市内循環・外回り」にて「高畑町」下車(約15分)。

近鉄奈良駅から：バスのりば1番発「市内循環・外回り」または「中循環・外回り」にて「高畑町」下車(約10分)。

大会関係各種連絡事項

○大会参加申し込みは、**10月10日（金）までに**下記の URL または二次元コードから申し込みフォームにアクセスしていただき、必要事項を入力の上ご送信ください。**締切厳守**をお願いいたします。**大会当日の参加受付はいたしかねます**ので、事前の申し込みにご協力ください。また、**電話による申し込みも応じかねます**。申し込みフォームにアクセスが難しい場合は、住所、氏名、電話番号、大会参加日、懇親会参加の有無、同伴者の有無（予定する場合はその氏名）を葉書に記入し（書式自由）、上記の期限までに4頁の問い合わせ先へお送りください。



<https://forms.office.com/r/b4deiTiNcy>

○大会参加費（資料代を含む）および懇親会参加費は、同封の「振込取扱票」に必要事項をご記入の上、**10月10日（金）までに**納入してください。念のため、振込控えは大会当日にお持ちください。年会費との合計金額の入金は禁止いたします。やむを得ず払込票を利用せず、口座に直接参加費を入金する場合は氏名の頭に「0」を付けて入金してください。なお、当日会場では、現金を取り扱いませんので、あしからずご了承ください。

○今回の大会では、**会員1名につき非会員1名の同伴参加を認めます**。非会員の同伴を予定している会員は、上記の申し込みフォームに同伴非会員の氏名・所属も登録してください。また、上記の「振込取扱票」により同伴非会員の参加費（大会、懇親会）も納入してください。

○大会参加費は、**一般会員が2,000円**（同伴非会員も同額）、**学生会員は無料です**（同伴非会員が学生の場合は無料）。懇親会参加費は、**一般会員・同伴非会員が5,000円、学生は会員・非会員を問わず2,500円**です。

	大会参加	懇親会参加	計
一般会員	○	○	7,000 円
	○	×	2,000 円
学生会員	○	○	2,500 円
	○	×	0 円

○今大会では、やむを得ない事情で会場へ赴くことが困難な方に対し、大会の模様をオンラインで配信いたします。この場合でも、一般会員には上記の期限までに参加費の納入が必要となります。オンラインでの参加を希望する方は、上記の申し込みフォームの所定欄に入力してください。

○**昼食は、各自でご用意ください**。周辺に店舗が少ないため、事前購入をおすすめします。会場の多目的ホールで昼食をとることが可能です。なお、役員・幹事の方には25日の昼食を別途用意いたします。

○宿泊ホテル等については、すでに会報でお知らせしたとおり、各自で手配していただくこととし、事務局では手配いたしません。大会開催日は正倉院展初日に当たるため、早めの予約をおすすめします。

○学会からの派遣申請書が必要な方は、学会ホームページにPDF ファイルを掲載しておりますので、印刷の上ご利用ください。

第 35 回 ('25) 書学書道史学会大会プログラム

10 月 25 日 (土) 於：奈良教育大学 講堂

12:00 受付開始

12:40～13:25 開会式・総会

13:30～15:00 研究発表

① 13:30～14:00 「江戸時代末期における「碑学」受容の濫觴

—市河米庵の著書に見える「北朝書」を一例として—

李 逍宇 (安田女子大学大学院) 【司会：中村史朗】

② 14:00～14:30 「初期大字かなにおける新たな評価軸としての「造形」の成立

—日比野五鳳の模索と日展のはたらきに注目して—

中井 希 (大阪大学大学院) 【司会：高橋利郎】

③ 14:30～15:00 「清朝中後期における趙之琛篆刻の史的 position 一白文印の展開を中心に—

草野 剛 (筑波大学大学院) 【司会：弓野隆之】

15:15～17:00 シンポジウム「簡牘にみる書文化の源流」

基調報告

馬場 基 氏 (奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長)

福田 哲之 氏 (会員、島根大学名誉教授)

井田 明宏 氏 (会員、安田女子大学文学部講師)

【司会：萱のり子】

17:30～19:30 懇親会 於：生協食堂

※会期中の特別展示 「学び舎の筆華 — 奈良教育大学の書と蔵書」 於：教育資料館

10 月 26 日 (日) 於：奈良教育大学 講堂

9:00 受付開始

9:30～12:10 研究発表

④ 9:30～10:00 「「褚遂良臨王献之飛鳥帖」について」

仲村康太郎 (京都大学大学院) 【司会：下田章平】

⑤ 10:00～10:30 「金文著録における「全形拓」の導入とその展開」

春田賢次郎 (台東区立書道博物館) 【司会：増田知之】

⑥ 10:30～11:00 「雁塔聖教序の波磔に見える修正線」

荒金 治 (大分県立別府鶴見丘高等学校) 【司会：尾川明穂】

⑦ 11:10～11:40 「満洲国美術展覧会における書の展示」

徳泉さち (日本大学) 【司会：高橋佑太】

⑧ 11:40～12:10 「朝鮮人書家の中国金石学との邂逅 —呉慶錫を中心に—

金 貴粉 (国立ハンセン病資料館) 【司会：鍋島稲子】

12:10～13:00 記念撮影・昼食

13:00～15:10 研究発表

⑨ 13:00～13:30 「書論における執筆法を学術的に検証し導き出された教材の提案 —カカトゲージ—

小川卓治 【司会：青山浩之】

⑩ 13:30～14:00 「魏三体石経の集字的性格」

高木義隆 【司会：福田哲之】

⑪ 14:10～14:40 「「曹望憺造像記」拓本考」

下田章平 (相模女子大学) 【司会：永由徳夫】

⑫ 14:40～15:10 「柳宗悦の書論 ―「民藝」が見た書の世界―」

中村史朗（滋賀大学）【司会：矢野千載】

15:20～16:40 記念講演

「聖武天皇の書と光明皇后の書」

西山 厚 氏（奈良国立博物館名誉館員）【司会：萱のり子】

※講師紹介は発表レジュメ集に掲載

16:40～16:50 閉会式

大会に関する問い合わせ先

書学書道史学会事務局 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル 7F
(株)毎日学術フォーラム内 FAX 03-6267-4555
Email: maf-syogaku@mynavi.jp

発表者への連絡事項

- 発表者の持ち時間は、30 分（発表時間 20 分、質疑応答 10 分）です。発表に際しては、時間厳守でお願いします。
- 発表者各位においては、発表資料を A3 判両面印刷最大 5 枚まで（複数枚の場合は綴じること）として 10 月 20 日（月）までに、下記の宛先へ送付願います。印刷部数は、14 日（火）までにお知らせします。
〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学書道研究室
担当：萱のり子先生 TEL 0742-27-9224
※送付伝票備考欄等に「書学書道史学会研究発表資料在中」と記載してください。
- 今大会では、やむを得ない事情で会場へ赴くことが困難な方に対し、研究発表をオンラインで配信いたします。発表者各位には、オンライン用に、発表資料のデータ（PDF ファイル）をご作成いただき、10 月 20 日（月）までに、こちらは事務局宛に E メール（上記参照）でご送付ください。
- 発表会場にはパソコン、プロジェクターを設置します。ご利用の場合、事務局宛にその旨をお知らせください。ご自身のパソコン（HDMI タイプ A 接続可能なもの）をご持参いただいても結構です。その際も、事務局へご一報願います。いずれの場合も、当日は USB メモリーをご持参ください（PPT データの他に、念のためその PDF データもご用意ください）。試写は、研究発表前の空き時間を適宜ご活用ください。
- 各発表の司会者は、諸般の事情で変更が生じる場合があります。

役員・幹事への連絡事項

- 理事・監事・諮問委員各位には、必ず2頁の申し込みフォームから理事会出欠のご回答をお願いします。幹事各位にも、同様に資料封入作業の出欠の回答をお願いします。いずれも昼食準備数を把握する関係上、ご回答にご協力ください。
- 理事・監事・諮問委員各位には、10 月 25 日（土）11:00より本年度第3回理事会を開催いたしますので、奈良教育大学 美術・書道実習棟 書道実習室 2へご参集ください。
- 幹事各位には、10 月 25 日（土）10:30に作業を行う上記の書道実習室 1へご参集願います。資料封入作業のほか、受付や大会運営のご協力をお願いしますので、ご承知おきください。

以 上

① 江戸時代末期における「碑学」受容の濫觴

—市河米庵の著書に見える「北朝書」を一例として—

李 道宇

一八八〇年（明治一三）の楊守敬来日が、日本における「碑学」普及の発端として長い間位置づけられてきた。しかしながら、杉村邦彦氏と中村史朗氏が筆談資料をもちいて、楊守敬来日より二年前にすでに巖谷一六によって「北魏体」の存在が知られ、学ばれていたことを明らかにした。また、大庭脩氏と大橋修一氏は、江戸時代の唐船持渡書目をもちいて、一八一〇年（文化七）の『因宜堂法帖』の舶来が「北魏書が日本に舶載された初出の例」（大橋氏）とする。ただし、杉村氏と大橋氏はともに、中国の法帖に収録された「北朝書」は当時において注目されなかったと推測している。このような研究状況を踏まえ、「北魏書が日本に舶載された初出の例」から「楊守敬来日」までの約七〇年間に於ける、「北朝書」をめぐる諸状況について改めて詳細に検討する必要があると思われる。

そこで本発表では、中国書に造詣が深く、「幕末の三筆」として名高い市河米庵（一七七九—一八五八）を取り上げることとする。まず、米庵が出版した書論書の『米庵墨談』、字書の『楷行薈編』の両書について、『因宜堂法帖』所収の北朝書との比較分析を試みる。それを通して、『米庵墨談』の異体字や重字の条において、『因宜堂法帖』所収の北朝書の文字が列挙されていること、また『楷行薈編』においても「東魏義橋銘」など同帖所収の文字が数多く採用されていることを明らかにする。また、『楷行薈編』の「例略」や跋文によって、米庵が本書を編纂するにあたって北朝書の文字そのものに「書道的価値」を見出していたこともあわせて明らかにし、さらには、これまで否定的に捉えられてきた『因宜堂法帖』についても再検討を加えたい。

本発表での検討を踏まえ、従来広く知られていた一八八〇年の楊守敬来日から四半世紀遡って、一八五五年の市河米庵による『楷行薈編』の刊行に、「碑学」受容の濫觴を確かに認めることができる」と結論付けられる。

（安田女子大学大学院）

② 初期大字かなにおける新たな評価軸としての「造形」の成立

—日比野五鳳の模索と日展のはたらきに注目して—

中井 希

本発表は、初期大字かなにおける視覚表現の模索と評価のあり方に注目し、「造形」が新たな評価軸として成立していく過程を明らかにする。具体的には、初期大字かな作品を分析し、その評価に用いられる語を整理することで、初期大字かなの制作・鑑賞・評価の過程において造形という概念が中心的な関心となったことを導く。大字かなは、昭和二十年代に新たに生まれた様式である。日展において書を絵画のように壁面で展示・鑑賞するにあたり、作家はそれに適した作品を模索した。その結果、大字かなは旧来の様式にとられず、各作家が独自の視覚表現を模索する中で成立した。

本稿では新たな評価軸としての造形の成立を三つの段階で論じる。第一に、古筆の視覚表現を大字かなに採用した安東聖空の制作である。安東は古筆を拡大し、伝統的な視覚表現を踏襲した。そのため、作品の評価には古筆の評価軸が用いられた。第二に、古筆に異質な要素を組み合わせ新たな視覚表現を生み出した日比野五鳳の制作である。日比野は古筆を踏まえながら「新鮮な書」を模索し、新たな様式に適した視覚表現を追求した。そのため、古筆の評価軸よりも、造形性の点から評価された。第三に、造形性という評価軸を書の主流として定着させた日展のはたらきである。日展では、作品の意味内容よりも、視覚表現のありさまそのものが評価と鑑賞の焦点となり、日展が回を重ねるにつれ造形が中心的な関心となった。日比野の実践はこの変遷の萌芽に当たり、大字かなの新たな評価軸の成立に大きく寄与した。

このように、本発表では大字かなの作品と評価の語の分析を通じて、展示方法に対応した作品の様式によって、作家の表現内容と鑑賞者の鑑賞経験が、造形を中心とした新たな段階へ移行し、日展で鑑賞と評価を繰り返すことで、造形が書における新たな評価軸として定着したことを明らかにする。そして、初期大字かなにおけるこれらの変遷が、その後の書のあり方を、視覚表現そのものに注目する造形芸術へと方向づける重要な転換点となったことを明らかにする。

（大阪大学大学院）

③ 清朝中後期における趙之琛篆刻の史的位置

— 白文印の展開を中心に —

草野 剛

清朝中後期の篆刻史に関する先行研究では、それまでの「印中求印」に対して、浙派による刀法の個性化、鄧派・鄧石如による「印従書出」、趙之謙や呉昌碩の「印外求印」が篆刻表現の発展における主たる要因と見なされてきた。「印中求印」はそれらの前提となる修養として看過されてきたのであり、浙派は刀法を除いて「印中求印」に拘泥したために、その作風の発展には限界があるものと捉えられてきたのである。

浙派の代表的印人である趙之琛の作風の評価については、趙之謙と魏錫曾が、趙之琛に至って浙派が衰退したとする批判を残しているが、葉一葦氏（『重論浙派』『西泠芸叢』三四、西泠印社出版社、一九九九年）は、このような批判が盲目的に引用されたために一般に貶められていると指摘しており、特に晩期の漢鑿印・漢玉印を追求した作風に対して再評価を試みている。しかし、そのような漢鑿印・漢玉印を追求が単なる部分的な取法対象の拡大と見なしてよいのかは一考の余地があり、この点は趙之琛が浙派を含む清朝中後期の篆刻史にいかん位置づくのかという問題に波及するものがある。

発表者はこれまでに「趙之琛の朱文印における作風の変遷と画期について」（『書芸術研究』一六、二〇二三年）にて、趙之琛がその朱文印において、明代及び清初の印人を範とすることで旧来の浙派の枠組みを脱却する作風を残していたことを指摘した。それを踏まえれば、趙之琛の篆刻創作についての先学の指摘は、単に部分的な取法対象の拡大にとどまらず、従来の「印中求印」とは異なる印学思想への転換と見なし得るのではないかと予想される。

以上により本発表では、趙之琛の創作手法と印学観の独自性はいかなる点に認められるか、それは浙派において定型化した作風から脱却し得たのか、趙之琛に至って浙派の篆刻作風がいかなる変容を遂げたのかを明らかにする。それを通して、清朝篆刻史における趙之琛の位置づけ、延いては「印中求印」に対する認識を新たにしたい。

（筑波大学大学院）

シンポジウム「簡牘にみる書文化の源流」

木簡・竹簡など簡牘の書には「生の歴史のことば」との向き合いがあります。本年度大会シンポジウムでは、奈良文化財研究所の馬場基先生を講師としてお招きし、開催地の風土的特色を生かした書文化の交流をはかるテーマを設定しました。中国の簡牘研究に取り組む会員二氏による提案とともに、日本・朝鮮半島・中国における書文化の源流をたどります。各基調報告をふまえ、書学、史学、考古学など多分野にまたがる知見を共有して東アジアの書文化について語り合い、書学書道史の現代的な課題を考えていきます。

〈基調報告〉

「木簡にみる書文化の源流」

馬場 基氏（奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長）

優品の書が書文化の粋をしめし、水準を高めて牽引するものだとすれば、日常的な書は書文化の基礎を固めて、その広がり担保するものです。日本列島で文字が普及し、書文化が形成される時代の、日常的な文字を今日に伝えるものが、古代の遺跡から出土する「木の札に文字を書いたもの」＝木簡です。「木簡に文字を書く」という行為を分析して、日本での書文化基礎の構築に迫りたいと思います。

「戦国竹書の出土と古文派の脈流」

福田 哲之氏（会員、島根大学名誉教授）

中国では一九九〇年代以降、竹簡に書写された戦国期の書籍（戦国竹書）の出土数が増加し、古文の実態説明が大きく進展している。本報告では、その中から清華大学蔵戦国竹簡を中心に文字・書法に関わる研究の一端を紹介する。さらにそれらの知見を踏まえ、西晋・太康元年（二八〇）頃に出土した汲冢書の整理者の一人である衛恒が著した「四体書勢」古文序の記述を検討し、書文化史における戦国竹書出土の意義について考えてみたい。

「後漢時代における新書体の様相

―長沙五一広場東漢簡牘を中心に―

井田 明宏氏（会員、安田女子大学文学部講師）

近二五年の間に中国長沙市で出土した簡牘の総数は、二〇世紀に中国西北地域から発見された簡牘の総量を超えた。中でも長沙五一広場東漢簡牘は書法史上の空白期間であった後漢時代中期を補う重要な資料であり、その書法には後世の新書体に連なる要素が看取される。本報告では長沙五一広場東漢簡牘を中心に後漢時代中期の書写資料に着目し、その書法の複層的な様を示すとともに、そこに見る新書体（楷書系、行書系）の位置を提示したい。

ゲストパネリスト紹介 馬場基（ばばはじめ）氏

一九七二年生。東京大学文学部卒業、同大学院人文社会系研究科博士課程中退。博士（文学）。二〇〇〇年、奈良文化財研究所都城発掘調査部平城宮跡発掘調査部史料調査室。奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室長等を経て、二〇二四年から独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長。専門は日本古代史・木簡学。東アジア木簡・簡牘の比較研究、および木簡を通じた文字文化研究などを行っている。



④「褚遂良臨王献之飛鳥帖」について

仲村康太郎

台北故宮博物院に「飛鳥帖」という紙本墨跡がある。帖本体と跋、印記によれば、この帖の伝来はおおよそ次のようになる。①もと王献之の「飛鳥帖」なるものが存在し、②それを褚遂良が臨し、③この臨本が南宋初に宮中にあったが、④のち趙孟堅の鑑蔵を経て、⑤元の至正年間には蘇天爵が所蔵しており、ときに柯九思と王守誠が跋を書きつけた、⑥明代には項元汴の有に帰し、その子孫に受け継がれ、⑦清の乾隆年間に内府所蔵となり、⑧いま台北故宮博物院に伝わる、というのである。むろん印と跋も含め、帖に記載される情報は鵜呑みにしてはならない。「飛鳥帖」の内容は王献之が「書訣」（書の秘儀要訣を記したもの）を奉呈するという趣旨の上表文であり、偽書と目される王羲之の「白雲先生書訣」にも言及する。また書中には王献之が飛鳥に五百七十九字の書を授けられ、それを範として書に妙達したこと、及び老婆に食事を恵まれ、匙に字を書いて報いたことも語られる。これらは歴史上の事実として、もとより信ずるに足りない。さらに、帖中には北宋後期以後に上表・書簡に用いられる語句も認められる。ゆえに、少なくとも①と②が成立しないのは明白であり、「飛鳥帖」は北宋後期以後に作られた偽帖とみなされる。

本発表では以上のことを確認したうえで、次いで『宣和書譜』卷十六、清刊本『墨池編』卷二・偽書「進書訣表」、唐・釈希一『筆勢集』（日本にのみ伝存）所収の偽書「王献之表」を紹介し、内容の相渉る偽書が「飛鳥帖」成立以前より存在していたことを示す。そして、そのような偽書が単に写本として通行するのみならず、一部にはやはり「飛鳥帖」のように法書形式で存在していた可能性をも指摘する。さらにこの可能性をふまえて、唐代に種々におこなわれていた、書訣と称される文献群と法書との関係にも考察を及ぼすこととしたい。

（京都大学大学院）

⑤ 金文著録における「全形拓」の導入とその展開

春田賢次朗

「全形拓」とは、古銅器をはじめとする、器物の全形を立体的に表現する拓法のことである。清時代に至り、考証学の隆盛に伴って出現したとされる。近年では、「全形拓」に関する論考が国内外で多く見られ、美術館・博物館の展覧会のテーマとして取り上げられることも増えており、活況を呈している分野と言えよう。

「全形拓」に関する先行研究の多くは、創始者や継承関係を再検討するもの・技法に焦点を当てたものに大別できる。創始者については、拙稿「全形拓の出現とその伝播」(展覧会図録『拓本のたのしみ』、公益財団法人台東区芸術文化財団、二〇二五)で、陳南叔(生卒年不詳)まで遡ることを明らかにした。後者の技法については、例えば桑椹が、「濫觴期」・「發展期」・「鼎盛期」の三期区分を試みている。桑は、民国期以降を「鼎盛期」と定め、この時期の特徴として、西洋から伝わった透視図法・素描の普及により立体感が向上したこと・墨の濃淡で明暗を表現する新技法が出現したことを指摘する。

しかし、桑が指摘するような技法の発展は、掛軸にすることを想定した「全形拓」のみを対象とするものである。従来ほとんど注目されてないが、「全形拓」は金文著録にも導入されており、それは「より正確に記録する」という目的のためであった。桑が指摘する「鼎盛期」の特徴は、この目的とは異なる、視覚的效果を重視する技法であり、民国期に編纂された金文著録中の「全形拓」においても看取されない。要するに、「全形拓」の技法は単線的な発展ではなく、目的に応じて複線的に展開したと考えるべきである。

本発表では、「全形拓」のもう一つのあり方、つまり掛軸以外の主たる場である金文著録を対象として、「全形拓」の導入とその展開について考察を進める。「全形拓」が古銅器の全形を保存する役割を担ったことは指摘されているものの、その具体的な意義については管見の限り解明されておらず、この点に本発表の意義がある。

(台東区立書道博物館)

⑥ 雁塔聖教序の波磔に見える修正線

荒金 治

雁塔聖教序の修正線は、早くから不思議な線として認識されていた。比田井天来と松田南溟は三五〇の点を『書学院本・雁塔聖教序』に記している。それが修正線であると実証したのが、荒金大琳である。筆者も一九九七年より雁塔聖教序の原石の写真資料と向き合ってきた。九八年には、荒金大琳が筑波大学で開催された書学書道史学会において写真資料を公開し、今日に至っては多くの研究者がその写真資料を用い研究に取り組んでいる。近年では、一箇所一箇所の線の修正という見方から文字全体の修正として線が修正されているという見方が定着してきたのではないだろうか。

本論では、「文字全体を大きくした」、「楷書的な表現とした」という観点からもう一度細部の表情を分析していきたい。数多くあるポイントの中で、波磔を取り上げたのは、波磔には特に右方向の強い動きがあるからである。

調査の結果、修正前は、孟法師碑に見られるような短い波磔が基盤となっていた。修正の方法としては、主にその短い波磔を長くするという方向で進められている。同時に、短いままの波磔が残留している場合もあり、長く修正したもの、太く修正したもののほかに、楷書の波磔としてはきれいに仕上がっているとは言えないようなものもあった。つまり、波磔の修正には、多くの種類が存在しており、必ずしもワンパターンで行われているわけではなかった。波磔の修正の観察を通して、修正の目的が文字を大きく見せることにあつたことは明らかである。

長く伸ばした波磔が横の文字との空間の大きさとかかわっている可能性もある。他の部首でも見られるように碑面全体を見通しての修正だからである。

今後、横線、縦線、左払いやねなどの修正部分を観察していくことで、修正の全体像が浮かび上がってくるだろう。今回の波磔は、雁塔聖教序の修正線の実態を明らかにしていくための一つの基点となることが予想される。

(大分県立別府鶴見丘高等学校)

⑦ 満洲国美術展覧会における書の展示

徳泉 さち

一九〇七年に東京で官設の美術公募展である文部省美術展覧会が開かれた。その後、一九二〇年代から一九四〇年代にかけて、朝鮮、台湾、「満洲国」においても内地の官展の制度に倣った美術展覧会が創設され、京城では朝鮮美術展覧会（以下、朝鮮美術展）、台北では台湾美術展覧会、そして、長春では満洲国美術展覧会（以下、満洲美術展）が開催された。そのうち朝鮮美術展と満洲美術展には絵画や彫刻、工芸などに並び、書部門が設けられていた。朝鮮美術展の書部門については、金貴粉氏によりその設立経緯や変遷が明らかにされているが（金貴粉「朝鮮美術展覧会における書部門廃止と書認識の変容」『書学書道史研究』第二六号、二〇一六年）、満洲美術展に「法書」というジャンルが立てられ、日本人、中国人の書作品が並列展示されたことについて従来、日本書道史研究でほとんど触れられてこなかった。

本発表では、一九三八年から一九四五年までの計八回にわたり開かれた満洲美術展を取り上げる。まず、展覧会図録や新聞記事などから、各回の運営者、審査員や陳列された書、入賞作の傾向などを明らかにする。通観していくと、初回から中盤までは、満洲三筆と呼ばれる羅振玉、宝熙、鄭孝胥ら「満洲国」大官が審査員として主導権を握るものの、次第に日本人側の思惑が顕在化していく過程がみえてくる。一九四二年の第五回展で部門名が「法書」から「書道」へと改称され、この頃より審査員評に、日本の国粹芸術である仮名の書を賛美し、その出陳を日本人、中国人に強く促す言説が出現してくる。また、中国人書家が伝統的な漢詩文や吉祥句を題材にするのに対し、日本人作品には国威発揚や「満洲国」建国の理念を謳う句が多く、日本人にとっては書道展がプロパガンダの具となっている様も見てとれる。「満洲国」の特殊性は書の本流である中国大陸に位置するという地理にある。この特殊な時間、空間で開催された満洲美術展の書は、今一度検討されるべき矛盾や問題を根深く孕んでいるであろう。

(日本大学)

⑧ 朝鮮人書家の中国金石学との邂逅

— 呉慶錫を中心に —

金 貴粉

呉慶錫（一八三一—一八七九）は朝鮮時代末期の訳官出身の書家である。呉慶錫の子息、呉世昌の『權域書画徴』によると、呉慶錫は燕京に派遣される中で、中国の書画蒐集を始め、金石や碑版法帖まで熱心に蒐集していた。彼は、早くから当時の社会的な情勢を察し、朝鮮開化派の一員としてもその名を馳せた。また、そうした頻繁な燕京往来により、当代の中国の官僚をはじめ、様々な人士達と交流を深めることで独自に書芸活動を展開させた。それにより朝鮮金石録の草分けとされる『三韓金石録』を記すなど、金石学研究においても成果をあげた。

従来の研究において呉慶錫が金石学・書学に傾倒した背景には、朝鮮後期から末期にかけて、いち早く清朝の考証学の風潮を朝鮮に伝えた金正喜（秋史・一七八六—一八五六）の影響が大きいとされ、新たな書画の担い手として登場した主に中人階層出身の閭巷文人の系譜は近代の書画家たちの多くに連なっているとその連続性が指摘されてきた（洪善杓一九九五年）。また、金正喜の実事求是的な金石学と書学を志向した一派は「秋史学芸派」と呼ばれ、呉慶錫もまた、その系譜に位置づけられてきた（金洋東一九八八年）。ただし、「秋史学芸派」の一員とされるのみで、呉慶錫個人の金石学に関する独自の研究成果への評価や、中国人金石家、書家との交流ならびにそれによる影響については、ほとんど指摘されてこなかった。

本発表では、金正喜の時代から朝鮮時代末期に至る金石学・書学研究の展開において呉慶錫が果たした役割について、中国における金石学・書学研究を介した人的交流を手がかりに解明していく。具体的には、呉慶錫が実際に収集し、影響を受けた中国金石著録を確認するとともに、『三韓金石録』の制作過程に認められる清末期の何秋濤（一八二四—一八六二）や潘祖蔭（一八三〇—一八九〇）などの中国金石学者との交流の実際を跡付けることにしたい。

(国立ハンセン病資料館)

⑨ 書論における執筆法を学術的に検証し導き出された教材の提案

―カカトゲージ―

小川 卓治

本稿は、書写書道教育の基盤でもある「鉛筆の持ち方・書き方」に留意し、指導方法の一端を担う新たな可能性について考察したものである。

江戸時代になると中国の書画論も豊富に復刻本が出されるようになった。書論としては「書法正伝」「漢溪書法通解」などが挙げられる。当時としては大変もてはやされた様子が窺われる。しかし、執筆法として述べられている内容は当時の様子は窺い知れないが、現代の書写書道教育において不足している部分であり、非常に興味の持たれる内容である。今回、この両者の執筆法を田上恵一氏の訳文・釈文を参考に執筆における手指の使い方について検証してみた。改めて、論じられている手指の動きを理学療法的、解剖学的、神経学的な動きと照らし合わせてみたところ非常に理に叶うところが多く、それら各々手指の動かし方を書写書道教育の指導に取り込み、活用を試みた。

本発表では、「カカトゲージ」と題し、腕・手・手のひら・指を正しく動かして書くことができるよう指導するものとなっている。誰でも正しい持ち方を容易に指導でき、正しく学習できることを追求した。手のひら・指などの役割については「漢溪書法通解」をはじめとする古くからの中国の書論を基盤とした。そこでは毛筆用に論じられてきたが、「カカトゲージ」はそれらを硬筆用に改良した例である。中でも「手のカカト」と「書く位置」に着目した。「カカト」とは右手首のやや左側の部分に骨があり、そのやや上あたりを指して「手のカカト」と呼ぶ。「書く位置」はその人が文字を書く際に書きやすい位置を指す。また、それは手のひらの大きさによって変わる。

ここに提案する教材は、一見視覚的には違和感が感じられるものではあるが、鉛筆の持ち方、筆の持ち方を指導するに、また、覚えるにおいて、具体的な内容は教材として適している。

⑩ 魏三体石経の集字的性格

高木 義隆

三体石経は、古文・小篆・隸書の三字一組になっている。魏の正始年間（西暦二四〇―二四九）に制作されたとされる。

この三体石経には、同じ文字の字形が酷似するという特徴がある。拓本で比較すると、細部まで酷似する文字が多い。これは、通常の書写ではなく、一つの原型を転写することで制作したものだと考えられる。なんらかの方法で原稿の紙、または石面に転写したと考えられる。これは、一種の集字碑であると推定できる。おそらく、先行する名跡からの集字ではなく、活字的性格をもった集字である。ただし、その転写技法を推定することはできなかった。また、三字を一組にした縦長の長方形の字格が石面に陰刻されているが、この刻された字格と転写技法の関係は不明である。

前述の特徴は前代の漢碑、漢石経には、みることができなかった。転写技法は、魏時代に普及したと推定される。ただし、魏時代の他の例は曹真碑に僅かにあるだけである。

三体石経には古文・小篆・隸書を品字形式に並べたものもあるが、出土した字数が少ないので、同じ現象があるかどうかは、現時点では解明できない。今後の出土を待つしかない。

清時代末期から中華民国時代に、三体石経の偽物疑惑が出たのは、集字による平板さも原因であったと思われる。

この三体石経が正始年間に刻された実物証拠は、西安碑林博物館にある一九五六年出土の残石である。一方、水経注、江式の論書表にも「正始年間」の制作だという記述があり、文献的支持となっている。

魏の時代に、このような集字による大規模な石経の制作が先行していたことが、約三〇〇年後の梁時代に集王羲之書が行われたことに影響している、と推量している。

⑪「曹望愔造像記」拓本考

下田 章平

「曹望愔造像記」は北魏の正光六年（五二五）の刻であり、アメリカのペンシルベニア大学考古学人類学博物館に収蔵されている。仏像部分は亡佚し、台座のみが残る。その三面に「曹望愔」に関わる画像が線刻され、一面に造像記が刻されている。野趣や剛毅さが漲る「龍門様式」が次第に洗練され、正光年間（五二〇―五二五）には、「張猛龍碑」（正光三年、五二二）、「高貞碑」（正光四年、五二三）といった洗練された北碑が出現しているが、この造像記は「高貞碑」に近似している。清の畢沅・阮元『山左金石志』（二七七七序）に、「碑字秀勁にして、已に唐人の法脈を開くこと疑ふ無し」と称揚されて以後に知られるようになり、後に金石の収蔵で著名な陳介祺（一八一三―一八八四）が秘蔵し、民国期にその後人から国外へ転売された。

この造像記の拓本に関しては、方若『校碑隨筆』にすでに見られ、松井如流「北魏・曹望愔造像」（『書品』一三七号、一九六三、二一四頁）では、「……そのように中国に数種、日本でも一種ある位だから、世上この模刻の拓本は相当流布していることであろう。」と指摘されているが、実際のところ、原刻本がほとんど伝世せずに、日中を問わず模刻本が広く流布している状況といえる。また、中国の発展に伴って、数多くのオークションが開催されて、この造像記も着目されるようになったが、模刻本が取引されていることもままあるように、模刻本が原石本を脅かしている状況にあるといえる。

そこで、本発表では、まず原石の通伝過程を確認し、日本の個人や所蔵機関に所蔵されている「曹望愔造像記」の拓本を調査した上で、拓本の伝本系統を明らかにし、淑徳大学書学文化センター所蔵拓本の真贋を明らかにしたい。さらに、他の石刻と比して、なぜこの造像記の模刻本が大量に制作され、特に日本で受容されたのかを解明したい。この検討によって、日本への碑帖流入の実態解明にもつながるものと考えられる。

（相模女子大学）

⑫柳宗悦の書論―「民藝」が見た書の世界―

中村 史朗

柳宗悦（一八八九―一九六一）は、日本近現代を代表する思想家として知られる。白樺派の主要メンバーで、文芸批評、宗教哲学等の論説を経て、日常に用いられる工芸品が有する美に着目して、「民藝」（民衆的工芸）の語を創出する（一九二五）。柳は、さまざまな発見を重ねるなかで「民藝」の美の領域を拡張し、意欲的に運動を展開しその概念の社会的定着をめざす。その後、「民藝」は広く一般に浸透し、本年、「民藝」は一〇〇周年をむかえるにいたっている。

今日では、「民藝」研究は世界的規模で行われており、その思想に影響を受けた創作活動も大きな波及を見せている。一方で、柳には少なからず書や文字に関する考察が見られるが、それらを対象にした検討はほとんどなされてこなかった。「書論」（一九三七）、「書道雑語」（同）といった論述は、工芸の生活美から出発した「民藝」の概念がすでに幅広く認知されてからのもので、柳は独自の視点を通じて書の鑑賞に新しい価値を提示しようと試みたと考えられる。柳が「民藝」において定めた、「日常性」「無名性」「用途性」といった視点は、必ずしも当時の書に関する言論に調和するものではなかった。たとえば王羲之書法の全面否定に見られるような極論があるが、それは耳目を驚かすことを企図したのではなく、別途に書美の気づきをもたらそうとしたものと位置付けられるのではないだろうか。また、その書論は独立して記述されたものではなく、当時一般に知られるようになっていたさまざまな立場の「六朝書道」を参照しながらなったものであることが見て取れる。柳自身、中村不折や文芸の同僚の姿勢を踏まえながら、碑拓の収集も試みていた。

本発表では、柳の書に関する言説を整理することで、その「民藝」思想がどのように書をとらえようとしたのかを考察し、くわえてその書に関する思考を解析することで「民藝」の性格の再検討を試みたい。また柳が提起する書的美観は、芹沢銈介の染色作品や、棟方志功の書作品に具現化する。それらの創作の内実にも言及したい。

（滋賀大学）

記念講演講師紹介 西山厚（にしやまあつし）氏

奈良国立博物館名誉館員、帝塚山大学客員教授、東アジア仏教文化研究所代表。

徳島生まれの伊勢育ち。京都大学大学院博士課程修了。奈良国立博物館で学芸部長として「女性と仏教」など数々の特別展を企画開催。主な著書に『仏教発見！』（講談社現代新書）、『僧侶の書』（至文堂）、『語りだす奈良 一一八の物語』『仏像に会う 五三の仏像の写真と物語』（いずれもウエッジ）など。さまざまなメディアを通して、生きた言葉で書き、語る活動が続けている。瑞宝双光章受章。

